

飼料イネ生産の現状と農家の意向

高山真幸

(秋田県農業試験場)

Present Conditions and Farmers' Intentions of Whole Crop Rice Production

Masaki TAKAYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

秋田県の転作における飼料作物は、主に永年性牧草として作付けされているが、その利用率は低く、転作田の有効活用による飼料自給率の向上が求められている。こうした中で、水稻を飼料として利用する飼料イネに対する関心が高まりつつある。そこで本報告では、県内における飼料イネ栽培の普及状況を概観した後、飼料イネの生産農家及び利用酪農家の意向を基に、粗飼料の生産及び利用上の課題と、その改善方向について検討する。

2 秋田県における飼料イネ栽培の普及状況

秋田県の飼料イネ作付面積は、2000年に0.1haであったが、新たな水田農業経営確立対策の施行や、専用収穫機の開発と、それへの導入助成等により、'01年は85ha、'02年は161ha、'03年には290haと順調に拡大している。その栽培法は移植が主体であるが、作付面積の3割には、省力技術としての直播栽培（播種様式は代かきを行う湛水直播）が採用されている。品種は、食用米で8割を超える「あきたこまち」が半分近くを占めており、以下「でわひかり」、「ふくひびき」と続いている（図1）。

3 雄勝地域における飼料イネ生産の取り組み

県南内陸部の雄勝地域では、2001年に、酪農家と耕種農家との連携により、自給粗飼料の生産拡大を進めるための組織として、A酪農協、役場、JA等による「雄勝地方稲発酵粗飼料推進協議会」が設立され、当地域が県のモデル推進地区に指定された。耕種農家が飼料イネの収穫前までの栽培管理を行い、収穫調製作業は、A酪農協の組合員が酪農協の所有するホールクロップ収穫機1台と自走ラップマシーン2台により共同で行っている。

'03年に、A酪農協の組合員が収穫調製作業を行った飼料イネの面積は21haで、品種は「あきたこまち」が大半を占めている。また、生産物であるホールクロップサイレージの単位面積当たり収量は、栽培農家によるばら

つきが大きい（図2）。早期収穫が可能な早生で多収の、地域に適した専用品種の育成と、良質サイレージの生産につながる安定的な栽培技術の開発が求められている。

4 飼料イネの生産農家と利用酪農家の意向

飼料イネの収穫前までの栽培管理を行っている耕種農家の意向をみると、飼料イネの栽培に取り組んだ理由には、「水田に転作としてイネを栽培できる」、「転作の助成金が高い」、「収穫以降の作業が不要である」が多く選ばれている（図3）。飼料イネを作付けする前の生産調整対応としては、その分の面積を調整水田としていた農家が多く、飼料イネの作付けが、水田であり手間をかけずに行える、比較的割のいい生産調整の手法として理解されていることを示している。栽培法としては、除草を始めとする各種防除が食用イネ並みに実施されるケースが多い（図4）。生産コストを低減し、ホールクロップサイレージの安全性を高める観点からも、飼料イネに適した農業低減型の栽培技術の徹底が求められている。

飼料イネを利用する側である、A酪農協組合員の酪農家の意向をみると、飼料イネの利用に取り組んだ理由として、「飼料費の低減になる」が挙げられている。「イネ発酵粗飼料給与農家への助成金がある」からという回答も多く、経済的なメリットを主なねらいとして導入されていることがわかる（図5）。開発・改良が必要な飼料イネに関する技術としては、耕種農家が「安定・省力・低コスト栽培技術」を、酪農家が「乳牛への効果的な給与技術」を重要視している（図6）。酪農全般の技術上の課題としては、「自給粗飼料の品質が不十分である」とことと「自給粗飼料が不足している」ことが指摘されている（図7）。飼料イネを用いた良質な粗飼料の生産及び給与技術の開発と、その普及が求められている。

飼料イネの省力・低コスト生産には、直播栽培技術の導入が有効な手段となり得る。しかし、生産されるサイレージの収量性や品質の確保、地域資源循環型農業の実現に不可欠な家畜糞尿堆肥の活用等の面で、移植栽培に比べて不利な要素もあり、飼料イネにおける直播栽培の安定化には、開発すべき技術が多く残されている（表1）。

5 ま と め

本報告は、飼料イネが、耕種農家にはイネの栽培でできる生産調整手法として、酪農家には飼料費の低減に貢献する作物として理解されていることを明らかにするとともに、酪農経営にとっての課題が、十分な粗飼料を安

定的に確保することであり、飼料イネを用いた良質な粗飼料の生産・給与技術が求められていることを指摘した。飼料イネ生産の普及には、助成制度が大きな役割を果たしてきたが、その水準が引き下げられる中で、更にその生産拡大を図るためには、このような技術開発を進めて、地域での資源循環を可能にする、耕畜連携による飼料イネ生産・利用体系を早期に構築する必要がある。

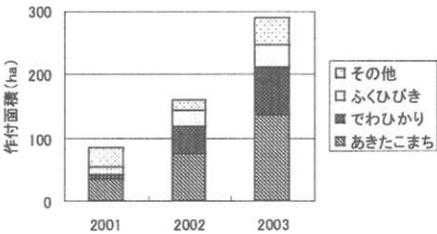


図1 秋田県における飼料イネの品種別作付面積
注) 秋田県農林水産部農畜産振興課資料より作成

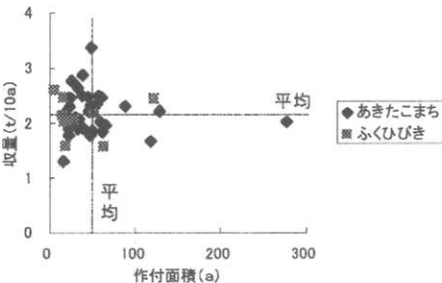


図2 イネホールクロップサイレージの農家別
10a 当たり収量 (2003年)
注) A酪農協資料より作成

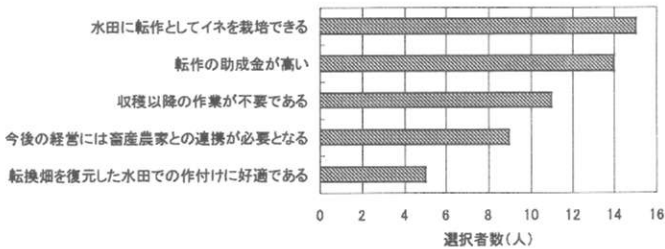


図3 飼料イネの栽培に取り組んだ理由 (耕種農家)
注1) 2003年調査・回答者17人、注2) 複数回答

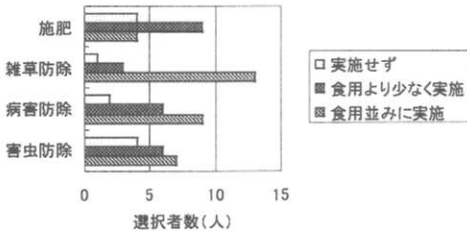


図4 飼料イネの栽培法 (耕種農家)

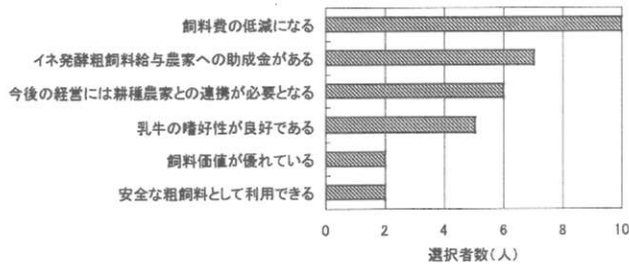


図5 飼料イネの利用に取り組んだ理由 (酪農家)
注1) 2003年調査・回答者10人、注2) 複数回答

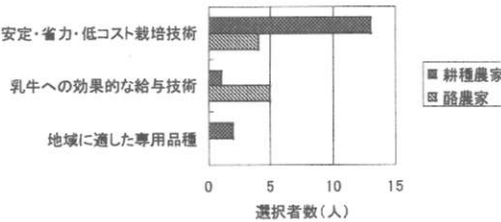


図6 開発・改良が必要な飼料イネの技術
(耕種農家・酪農家)

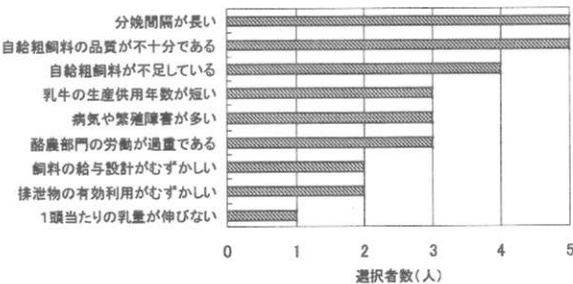


図7 酪農全般の技術上の問題点 (酪農家)
注) 複数回答

表1 飼料イネの直播栽培に関して開発が必要な技術

項 目	問 題 点	開発が必要な技術
農業薬剤費の低減	初期雑草の影響が移植栽培より大きい。	安全・低価格な除草剤と耕種防除法
農機具費の低減	直播用の播種機が必要となる。	低価格な播種機と他作物への汎用技術
家畜糞尿堆肥の利用	土壌還元が出芽・苗立ちに影響しやすい。	出芽・苗立ちしやすい専用品種と良質堆肥製造技術
サイレージの増収	生育量が移植栽培より小さく減収しやすい。	多収品種と安定生産技術
良質サイレージの生産	生育が移植栽培より遅延し収穫・調製の適期作業を妨げる。	早稲品種と生育促進技術